二〇一六年一一月二五日

朝日射す墓地の一隅返り花　　ま　ゆ
抽んでし銀杏黄葉や雑木山　　明日香
バギーカー存問せんと秋の蝶　　豆　狸

二〇一六年一一月二四日

かずら橋渡る奈落の川涸れて　　たか子
ありがたき小春の日差し庭手入れ　　よし女
塔見ゆる楓もみぢの葉隠れに　　なおこ
久闊の友と露天湯夕紅葉　　せいじ
ででむしの転がり出でし落葉掻き　　こすもす
猫好きに寄りくる野良や紅葉寺　　なつき

二〇一六年一一月二三日

綿菓子のごとくに呆け枯芒　　明日香
だみ声の手締め轟く酉の市　　智恵子
みちのく旅楽しめと山粧ふ　　せいじ
飛行雲茜に染めて秋日落つ　　豆　狸
蓋取れば上機嫌なるおでん種　　たか子
雲切れて光芒しるく冬陽さす　　泰　山

二〇一六年一一月二二日

錦繍の遠嶺引き寄す望遠鏡　　やよい
一渓へなぞへを埋む朴落葉　　さつき
姦しき鵯の鋭声や紅葉谷　　三　刀
布にして纏ふてみたき照紅葉　　よし女
切通風にかけだす落葉かな　　泰　山

二〇一六年一一月二一日

しぐるるや山また山の陶の里　　菜　々
日当たらぬ古き社の露の磴　　ぽんこ
瀬音聞く峡の奈落へ紅葉散る　　ひかり
藁庇すだれのごとく柿吊るす　　泰　山
蜘蛛の囲の虜となりし紅葉あり　　豆　狸
ゆくほどに色重ねゆく紅葉谷　　さつき
時雨去り山に日差しの戻りけり　　隆　松
新走り夫は試飲に余念なく　　たか子
走り根を隠すばかりに落葉積む　　せいじ
神様を賛美するごと小鳥来る　　なおこ

二〇一六年一一月二〇日

隠沼を砦としたる浮寝鳥　　せいじ
野良猫の吾に媚びくる枯田道　　豆　狸
散紅葉絨毯模様なせりけり　　ともえ
城門に手斧の傷や身にぞ入む　　菜　々

二〇一六年一一月一九日

昨夜雨にいよよ哀れや破れ芭蕉　　よし女
色変へぬ磯馴の松や古戦場　　さつき
梢洩る日に映ゆ峡の散紅葉　　さつき
翻るとき白銀となる千鳥　　三　刀
みかづきへ千手拡げし大枯木　　宏　虎
黙祷すマリアの像へ黄落す　　たか子
錦秋が荘厳したる古墳かな　　こすもす

毎日句会みのる選・二〇一六年一一月二七日